

九鬼周造とハイデッガー

——実存概念をめぐる——

はじめに

九鬼周造は、実存における最も重要な問題として以下のことをあげている。「実存のこの現実性と実存のこの可能性とは如何なる可能性に立つか……この問題は個体的本質と個体的存在との関係の問題とからまって実存に関する最も根本的な玄遠な問題をなしている」(1) (二・88)。現実性とはつまり、生の事実性であり、可能性とは意志によって選択され、遂行される可能性のことである。この両者の関係は一般に実存哲学における一大問題であるが、特に深い考察をおこなったのが、ハイデッガーである。そして、九鬼もまた実存と存在をめぐるハイデッガーの思索に傾倒した一人であった。九鬼は昭和六年から七年にかけて行われた講義「Heideggerの現象学的存在論」において、「*Sein und Zeit*」を

宮野 真生子

詳細に解説し、とくに事実性と可能性をめぐる「被投的投企 *geworfener Entwurf*」の概念を高く評価している。しかし、その論述を詳細に見るとき、九鬼による「被投的投企」の解説にはある改変が加えられ、その上で評価が与えられていることに気がかされる。その改変の背後にあるのは、九鬼独自の実存観である。それゆえ、九鬼がハイデッガーの「被投的投企」の何を問題視し、改変するに至ったのかを明らかにすることは、九鬼独自の実存観を説明することに繋がる。ただし、この改変を考える際、次の点に注意する必要がある。それは、九鬼とハイデッガーにおいては「実存」の意味するところが異なるということである。ハイデッガーの「実存」は現存在がそのつど関わり合う存在、「現存在の存在」を指すのであるが、九鬼の「実存」とはむしろハイデッガーの言うところの「現存在」を指す。それゆえ本論文は、ハイ

デッカーの現存在分析の核である「被投的投企」あるいは「先駆的決意性 *vorlaufende Entschlossenheit*」と九鬼の「偶然性としての実存」を比較することで、九鬼実存概念の射程を測ることを目指す。

一 九鬼による「被投的投企」の解釈

九鬼のハイデッカー解釈に入る前に、ハイデッカーが *Sein und Zeit* で展開している現存在分析を簡単にまとめておく。ハイデッカーによれば、世界Ⅱ内Ⅱ存在としての現存在の存在を構成する統一体は「関心 *Sorge*」である。そして、関心の具体的構造が「被投的投企」である。現存在とは自ら選ぶことなく、気づいたときには世界Ⅱ内Ⅱ存在として自らの「現 *Da*」を存在している。その投げ込まれているという事実性こそが被投性である。しかし、一方で現存在は世界Ⅱ内Ⅱ存在として世界の内にあり、開示態として世界を了解している。このような了解が可能であるのは、現存在が常に「自らの可能性を存在するありさまで存在して」(SUZUKI) おり、開示態として存在可能を「投企 *Entwurf*」するからである。しかし、投企される可能性は決して新たに見出されるわけではなく、現存在はつねに特定の可能性のなかにはまりこんでいる。それは「被投的な可能性」でしかない。それゆえ、世界Ⅱ内Ⅱ存在としての現存在は「被投的投企」という実存論的構成をとる。そして、この「被投的投企」をさらに全体化本来化

したところに見出されるのが「先駆的決意性」である。その全体化本来化は良心の呼び声によって引き起こされる。つまり、日常を生きる現存在は良心の呼び声によって不安のうちに呼び起こされ、自らの根柢にある無を見出し、同時に自らの存在可能を受け取る。その無とは被投性として存在する以上、現存在の存在可能もまた自らによって与えたものではないという無であり、またある可能性を選ぶことで他は選択されなかったという無である。そこで、被投性の無を直視し、自らの存在可能を投企することで、根柢存在となり、本来的自己として出来ることこそ、先駆的決意性なのである。

この被投的投企を九鬼は「Heideggerの現象学的存在論」において次のように解説する。「被投性とは *Dasein* が既に出逢っているものである。偶然のものである。……投企は空漠たる投企ではない。投げるには投げられたものを踏板として投げなければならぬ。投げられて落ちて来る。それが遇うのである。それが偶然である」(十・§§)。これはハイデッカーの考えをそのまま踏襲しているように見える。が、ここにはハイデッカーにはない観点が導入されている。それが、「偶然」である。九鬼によれば、偶然とは被投性との出会いの瞬間をいう。その出会いから可能性の投企が行われる。つまり、偶然とは現存在が被投性から可能性へ赴く際の転換点に位置するものであり、可能性の投企へ行くための踏板となるものである。この転換点としての偶然性こそ、

九鬼が新たに導入した観点であった。ハイデッガーにおいて、被投性から可能性への展開は、先駆的決意性を通じて被投性の無を実存の本来的な可能性として取り返すことで、根拠存在として出来ることであった。そして、そのような現存在こそ、全体的かつ本来的存在であるとされた。このとき、被投性を可能性として受け取る被投的投企は一つの連続した運動であると言えるだろう。しかし、九鬼は被投性との出会いにおいて一旦立ち止まり、被投性との出会いに偶然性という新たな役割を与える。それによって、連続していたはずの運動は、被投性との出会いと偶然性を転換点として開始される可能性の投企という二つの運動に切断される。偶然性（被投性との出会い）を受けとめるべく立ち止まり、そこからもう一度飛び立つことこそ、九鬼の考える「被投的投企」であった。そして、運動に切れ目をいれ、転換点となる偶然性こそ、最も九鬼が重視したものであった。この考察を経て、九鬼は『偶然性の問題』で「偶然こそは『一つの現存在』である。『一つの実存』である」(二・213)と言うに至る。このとき、九鬼は「先駆的決意性」として可能性の投企による本来的実存を提唱したハイデッガーと袂を分かたつ。しかしなぜ、被投的投企は偶然性によって切断されねばならなかったのか、そしてその偶然性が実存であるとは一体どういうことなのだろうか。

二 「先駆的決意性」から「偶然性」へ

しばしばハイデッガー批判として言われることであるが、本来、被投性と可能性の投企は「D₁」を構成する二大要素であったにもかかわらず、「先駆的決意性」から時間性が導出されるに至って被投性と可能性はもはや同等の比重を持たなくなる。現存在の存在論的意味である時間性を導出したハイデッガーは言う。「決意性は、将来的におのれへ帰来 zurückkommenしながら、現前しつつ状況のなかにおのれを連れ出す。既存 Gewesenheit は将来 Zukünft から発源し、このことによって既存せる将来がそのなかから現在 Gegenwart を生む」(SuZ236)。時熟において優位に立つのは将来であり、被投性が明らかになるのは現存在が将来的に帰来する限りでの、引き受けられるべき可能性としてである。ここではもはや被投性と可能性は同等ではなく、被投性は可能性に吸収されている。しかしこのとき、「良心」と「負目」の分析を通じて見出された被投性の無的性格はどうなったのだろうか。被投性が可能性として引き受けられるということは、被投性において見出される無が隠蔽されることに繋がるのではないだろうか。なぜなら、現存在が可能性の投企によって根拠存在として出来るとき、その根拠の根柢に引き受けられた被投性の無があるろうとも、根拠が設立された以上、無は根拠の内に引き取られざるをえない。このような根拠の内に引き取られた無と被投性に直面する

とき開示される無は同じものなのか。『形而上学とは何か』¹³においてハイデッガーが述べるように、被投性に直面するとき開示される無とは「存在者を全体として滑り落ちさせる」ものである。このような無と根拠の内に引き取られた無は明らかに異なっている。ゆえに、被投性が可能性の投企によって引き取られるとき、そこには齟齬が生じ、何らかの隠蔽が存在するのではないか。このような問いは次のような問いを私たちに喚起する。つまり、そもそも被投性とは可能性の投企によって引き受けられることができるものなのかという問いを。むしろ被投性を引き受けることは、決して「根拠にならないこと」ではないか。というのも、被投性に直面するとは、自己の存在の無根拠性を知ることであった。そうであるなら、被投性の引き受けとは、無根拠性にとどまることを意味する。無根拠にとどまる被投性の引き受けと、根拠存在となる可能性の投企のあいだには、明らかに溝がある。しかし本来、この溝、異なる二元こそが「現D」を構成し、被投的投企の在処であるとされたはずである。ところが先駆的決意性は、可能性の投企から被投性へという連続的な運動によってこの溝を埋めてしまう。この溝が埋められるとき、本来の意味での被投的投企の意味はもはやなくなっている。もちろん、ハイデッガーも「根拠になること」は「根拠を支配すること」ではないこととわっている。しかし、将来性優位の時間性に立ち、可能性の投企（根拠になること）から実存を捉えるハイデッガーの論理構成は、

このような被投的投企の実相を考えるうえで不十分だと言わざるを得ない。

このハイデッガーの問題点は、被投性と可能性の関係という問題設定を共有し、「被投的投企」に共感を持つ九鬼にとって見逃ごせないものであった。九鬼は将来の優位に理解を示しつつも言う。「然しながら、時間性のほかに空間性の原本的意義を承認して来るならば、将来に対して現在が重みを増し、可能性に対して偶然性が力を得て来るであろう。……ハイデッガーにあって『被投性』とか『運命』とかいう概念は必ずしも看過されてはいないが、空間性と共同存在性とが重量を有たぬに伴って偶然性の存在学的意義は視野の外に逸してしまっている」(三・三〇)。ここで九鬼は「被投的投企」と時間性の枠組み自体を否定しているのではない。彼が危惧するのは、将来の優位から時熟を導くことで、おのおのの契機を持つ意味を一元化し、被投的投企が本来持っていた意味を打ち消すことである。このような事態を回避すべく、九鬼はハイデッガーが時熟の構造において将来／可能性に置いた力点を現在／偶然性へと移す。しかし、なぜ現在／偶然性なのか。九鬼によれば、現在とは、「可能が現実面へ出会う」(二・209)刹那である。様々な可能性がありながら、実際におこる出来事はそのうちの一つである。もちろん、そこに可能性の大小はあるが、可能性として不確定の要素を孕んでいる以上、それが現実化するのとは偶然である。それゆえ現実が生成する現在はずねに偶然性と

いう様相をとる。このような偶然性は、「たまたましかある」ものゆえに、存在する根拠を持たない。そこで開示されるのは、自らの力ではいかんともできない状況にただ投げ込まれているという被投性、無根拠性である。このような根拠なく存在する偶然性について九鬼は言う。「偶然性はみづから極微の不可能性でありながら、極微の可能性を先端の危きに捉えることによって、……可能性に可能性を孕んで、遂に必然性に合致するのである」(二・188)。偶然性は、被投性の無根拠に出会う刹那であるだけではない。同時に無と有の接点として、可能性を現実へ向けて動かし生じる出発点でもある。このような偶然性は、被投性と可能性の投企が出会う面として、両者のいずれにも荷担することなく、両者の界面に位置する。偶然性は被投性と可能性の二元をいずれかに統合することなく「出会い」の界面として、そのままに保つ。それゆえに、偶然性は、被投性と可能性のあいだに存在する溝を表現するものであり、被投的投企の実相を明らかにするものなのである。九鬼が偶然性を実存分析の中心に据えたのは、それこそが被投的投企の二元性をそのままに取り出し、実存の実相を表すものだったからなのである。

三 偶然性としての実存とは何か

ハイデッガーの思索が被投的投企から先駆的決意性へと深化するとき、そこには現存在分析を詳細にするという目的と同時に、

この二元をいかに生き、本来の実存として出来するかという問題意識があった。たしかに九鬼は、被投的投企を偶然性から捉え返すことで、被投性と可能性の二元をはらむ実存の構造を取り出すことを可能にした。偶然性に基づく実存分析は、実存の構造を的確に表す論理構成であると言えるだろう。しかし、このような分析は現状認識にすぎないのではないのか。二元を孕むことと、二元から被投的投企あるいは先駆的決意性によって実存として出来ることは異なる事態ではないのか。実存として出来るためには可能性の投企が必須であらうし、その意味でハイデッガーの将来性優位の分析は一定の正当性を持つのではないか。九鬼による偶然性の議論を、ただ実存のもつ二元性を取り出す論理と考えるなら、このような疑問は不可避である。しかし、九鬼にとって偶然性とは実存の実相を表す論理構成上の重点というだけではない。「偶然こそは『一つの現存在』である。『一つの実存』である」(二・218)と言うとおり、九鬼にとって偶然性を生きることこそが実存として出来ることであつた。しかしなぜ、偶然性こそ実存の生きる道なのか。異なる二元を孕む偶然性からいかにして実存は出来ることができるというのか。そこには、将来/可能性重視のハイデッガーに対する更なる批判と九鬼独自の「実存」概念がひそんでいる。

さて、九鬼は更なるハイデッガー批判として次の問いを立てる。すなわち、実存が可能性の投企へ向かうとき、被投性が開示する

圧倒的な無の前から可能性の投企へと実存を向かわしめるものは何か、隔たりを超えて投企に赴く転換点にあって、投企を促すきっかけとなるものは何かという問いである。先に見たように、被投性が開示する無は圧倒的な力をもって存在者を滑り落とさせ、被投性と可能性のあいだには簡単に超えられない隔たりがある。投企においてその隔たりを超えさせるものは一体何か。ハイデッガーにおいて、この転換の役割を果たすのは、不安の心境である。現存在は良心に呼びかけられるとき、不安を感じる。不安のなかですべてが滑り落ち、端的な現存在の姿、被投性と存在可能をもつ現存在の姿が明らかになる。そのなかで現存在は自らの存在可能に向かって呼び出される。「呼び声は、現存在を自らの負い目ある存在可能へと容赦なく孤独化させ、そしてその存在可能を本来的に存在することを、現存在に迫る」(§43, 3)。それゆえ、ハイデッガーにおいて、可能性の投企を促すものは、良心の呼び声によって不安のなかに立ち、無に晒されることそれ自体である。しかし、ハイデッガーの言うように、不安による被投性と存在可能の開示は、即可能性の投企に繋がるのだろうか。可能性を開示することと投企することは同一のことなのか。九鬼が問うのはこの点である。というのも、現存在は良心の呼び声によって「存在可能を存在することを迫られ」て、決意性となる。「迫られ」、決意することのうちにあるのは一体何であろう。九鬼は、『*Sein und Zeit*』の展開を次のように言う。「未来に重点を置く時

間論は目的論的と云うことが出来る。…… Heidegger の時間論は甚だ倫理的的色彩を帯びている〔良心―決意性―時間性〕」(十・15)。九鬼は『*Sein und Zeit*』の根底に潜む倫理性を指摘し、可能性の投企の裏側にあるのもまた「存在することを迫る」という倫理的要請であることを見取る。死への先駆と存在者全体を滑り落ちさせる無は圧倒的な力を持つものである。その前で現存在は崩れ落ちるだけで、可能性へ投企し、生へと向かうことは困難である。そこでハイデッガーはそこに良心の呼び声という隠れた倫理的要請を打ち込む。そのとき初めて現存在は踏みとどまり、無のなかから可能性へ向かう。しかし、倫理的要請とは本当に転換点となり、可能性へと向かわしめる力をもつものなのか。というのも、このような倫理的要請は実存の構造に内在するのではなく、ハイデッガーによって外部から持ち込まれたと考えられるからである。しかし外部からの要請は真に力あるきっかけとなるのだろうか。外部からの要請ではなく、実存それ自身に基づきかけこそ、真に実存を動かし出来せしめるものではないか。九鬼はそう考え、実存の構造に基づき内部から生まれるきっかけを求め、それこそが、「偶然性」なのである。しかし、なぜ偶然性なのか。

九鬼によれば、偶然性とは「不可能性の虚無性を帯びながらもお且つ可能性を媒介として現実性を占めている」(三・21)。偶然性は被投性の無根拠に晒されながら、にもかかわらず存在してい

る。偶然性は「不可能性の虚無性から生まれ落ちて自己の現実性を大声に叫ぶ」(三三三)ものである。このような偶然性は単なる無根拠に存在するものではない。むしろ、偶然性は存在しないことも可能であったのに、にもかかわらず存在しているという、存在の「有り―難さ」、かけがえなさを開示する。無根拠を抱えながらも、否、無と背中合わせの有であるがゆえに、偶然性は自己の存在のかけがえなさを開示する。もはや被投性との出会いが開示する無根拠性は、存在者全体を滑り落とすだけのものではない。同時に偶然性として存在のかけがえなさを実存に与え、自己の存在を愛することを可能にするのである。自己の存在を愛することで、初めて実存は無と死から自己の生そのものへ向かうことが可能になる。つまり、可能性を投企することで生きることへと向かうことができる。(一)において、九鬼は被投的投企を偶然性によって切断し、偶然性を可能性へと向かう「踏板」と述べていたが、偶然性が踏板となることができるのは、まさに偶然性のもつこのような性質によるのである。実存は偶然性によって存在の「有り難さ」を受け取るとき初めて、それをバネとして可能性へ向かうことができる。偶然性こそが、実存を出来せしめる。それゆえに偶然性こそが実存の生きる道と考えられたのである。

結びにかえて

九鬼にとって、偶然性とは二元を孕む実存を表すための論理構

成であると同時に、実存として生きるための出発点でもあった。ハイデッガーの実存が可能性と被投性の二元を「先駆的決意性」によって一元化することで、全体化されるのに対して、九鬼の考える実存は二元の分裂をそのままに生きること、ある意味で全体化を拒否し、無根拠にとどまることで成立する実存であると言えるだろう。このような分裂を生きることが、二元に引き裂かれる痛みを伴う。しかし、そこにしか自己の存在のかけがえなさが宿らないとしたら……。九鬼が求めたのは、そこに成立するかけがえのなさ、「個性性」であった。これこそが九鬼哲学全体を貫く問題意識であることを示唆して、論を閉じたいと思う。

(1) 九鬼周造の著作は『九鬼周造全集』(岩波書店・一九八〇)から引用し、(巻号・頁数)の形で示す。なお、引用に際しては、旧漢字・旧かな使いを新字に改めた。

(2) Martin Heidegger, "Sein und Zeit", Max Niemeyer, Tübingen, 1972. 本書からの引用は引用文の末尾に(S27頁数)という形で示す。訳語に関しては現在定着しているものではなく、九鬼の訳語に統一する。現在の訳語と大きく異なるものがあるが、そのようなものに関しては原語を付した。

(3) Martin Heidegger, "Gesamttausgabe 9 Wegmarken", Vittorio Klostermann, 1975, p. 112.

(みやの・まきこ) 日本哲学史、京都大学大学院